

五百木良三のジャーナリズム活動に関する一考察
—『小日本』記者から『日本』編集長時代を中心に—
A Consideration regarding Ryozo Ioki's Journalism.
—From “Sho Nihon” reporter to “Nihon” chief editor in his days.

石川 徳幸
Noriyuki ISHIKAWA

日本大学 法学部 Nihon University College of Law

要旨…本研究は、五百木良三が新聞記者となった経緯と、日露開戦期における五百木良三のジャーナリズム活動を明らかにしたものである。五百木良三(1871～1937)は、明治中期から昭和初期にかけて国粋主義の立場から言論活動を行った人物であるが、俳人としての知名度や政治活動家としての認知度に比べ、新聞人としての五百木良三の活動はあまり知られていない。そこで、五百木良三が新聞に関与するようになった経緯を、正岡子規が主宰した『小日本』の記者時代から日本新聞社の編集長に就任するまでの期間を中心として明らかにした。また、五百木が日本新聞社の編集長として関与した『日本週報』は、対露強硬論を早い段階から主張した新聞であり、日露開戦期の新聞の中でも異彩を放つメディアであったことを明らかにした。

キーワード メディア史、対外硬運動、国粋主義

1. はじめに

(1)問題の所在

本研究の目的は、五百木良三(1871～1937)の明治中期におけるジャーナリズム活動を詳らかにし、彼が関与した雑誌や新聞が日露開戦期のメディアとしていかなる性格を有していたのかを歴史的に位置付けることにある。なお、本報告の中では現在では使用されない表現が用いられる場合があるが、これは史料に掲載された表現をそのまま紹介することを重視したためであり、差別的な意図や特定の政治的な思想を含むものではない。

近年、日露開戦過程の新聞を分析した研究が発表され、いわゆる「開戦論」が本格的に新聞紙上に掲載されたのは1903年9月末以降のことであり、これまで早期開戦論に分類されていた『日本』なども、それ以前には明確な開戦論に移行していたわけではないことが明らかにされている¹。報告者もこれまでに、当該時期の新聞に掲載されたロシア関連記事の分析を行っており²、新聞論調についても追試を行い同様の知見を得ている。

しかし、新聞『日本』が附録として週に1回発行していた『日本週報』だけは、旧来の説の通りに早期から開戦論を主張していたと見做すことができる。『日本週報』は、ロシアが満州還付条約の第2次撤兵期限を反故にした1903年4月頃から「干戈尚辞せざる可きなり³」と早期開戦論を打ち出し、ロシアのクロパトキン陸相が来日した6月にも「満州問題に就きては、最早や議論など喋々す可き時に非ず⁴」と論じ、9月には「日露開戦論」を主題にするなど、一貫してロシアに対する強硬な意見を掲載し続けたのであった。これは同じ時期の新聞『日本』本紙の論調と比べても異彩を放つものである。クロパトキン陸相の来日に関して『日本』本紙は、「日露両国の交誼に向ひては好影響あるべきは疑なし」と満州問題が好転することを期待しており、「我が国民の一般の必ず相当の敬意を以て前例なきこの来賓を歓迎すべき⁵」であると論じている。つまり、『日本』

¹ 片山慶隆(2009)『日露戦争と新聞』講談社メチエ、p86。

² 石川徳幸「日露戦争開戦過程における新聞報道」(日本マス・コミュニケーション学会2008年度秋季研究発表会個人発表)。

³ 「露国の不信」『日本週報』1903年4月13日付。

⁴ 「只断あるのみ」『日本週報』1903年6月22日付。

⁵ 「日露開戦論」『日本週報』1903年9月28日付。

⁶ 「露国大臣の来遊(続)」『日本』1903年6月10日付。

本紙とその付録である『日本週報』は異なる論調を展開していたのである。『日本』本紙の論説は、主筆兼社長の陸羯南の他に、三宅雪嶺と福本日南が担当していたが、陸羯南は1903年6月から翌年1月まで洋行に出ているため、この期間は三宅雪嶺と福本日南が担っていたと考えて良いだろう。それでは、『日本週報』の論説に携わっていたのは誰であったのか。この疑問を追う中で浮かび上がってきた人物が、当時日本新聞社で編集長の立場にあった五百木良三である。

一般的に、五百木良三に関しては大別して2通りの認識がなされていると思われる。第1は、俳人としての存在である。五百木良三は飄亭と号した俳人として知られ、正岡子規からは「文学に於ける一種の天才」と評されており、河東碧梧桐も五百木の俳句の才能を讃述している⁸。第2には、政治活動家としての存在である。五百木良三は日露戦争の講和条約反対運動や宮中某重大事件などに関して黒龍会の内田良平らと行動を共にした政治活動家でもあった。五百木良三と内田良平はともに1937年に死去しており、合同の追悼会が催されている⁹。

しかし、五百木良三の67年の生涯においては、俳人や政治活動家としての活動の他にも、医師や新聞人としての側面も存在する。日清戦争から日露戦争期にかけては、対外硬派の雑誌や新聞に関与したことで、世の中の日露開戦論の高揚に一定の役割を担ったと考えられる。本報告は、この当時の五百木良三の活動を明らかにしようとするものである。なお、本報告の射程から外れるため詳述しないが、五百木は晩年に政教社の社長となって雑誌『日本及日本人』を主宰している。そこでは、ロンドン軍縮条約反対のキャンペーンなどの言論活動を行っている。

(2) 先行研究

五百木良三を主題に掲げた学術的な研究は管見の限り存在しない¹⁰。その理由の1つには、五百木良三は文学方面と政治方面とに広く活躍したにも関わらず、代表されるような著作を残さなかったことがあげられる¹¹。そのためか、俳人としては正岡子規や河東碧梧桐の影に隠れ、新聞人としては陸羯南に及ぶべくもなく、政治活動家としても近衛篤磨や内田良平の周辺人物として描かれるにとどまり、歴史の表舞台に出てこなかったのである。日露戦争100周年を迎えた2004年以後、これらの人物に関する研究業績が新たに蓄積されはじめ、それらの中で五百木良三という名前が散見されるようになった。しかし、先述のとおり五百木良三について包括的に研究した文献はなく、人名事典などにさえ記載のないケースが多い。そのため、五百木良三という人物については、ほとんど「名前は聞いたことがあるがよく分からない人物」といった認識にとどまっているのが現状だと思われる。それらの認識においても、先述のように俳人や昭和期の右翼活動家としてのイメージが強く、新聞人としての五百木良三はあまり知られていない。

五百木良三を主題とした研究がみられない第2の理由として、史料の不足があげられる。五百木良三の息子は太平洋戦争中に戦死しており、後嗣がなく五百木良三の遺物を親族をあてに追うことができない。そのため、研究の手段としてはまず新聞や雑誌に投じた文学作品や論説を拾い集めることと、関係した人物が残した書簡をもとめることになる。晩年には講演も行ったようであるので、講演の記録などが残っていればこれらにもあたる必要があるが、今回は報告の範囲から外れるため、現状では確認しきれていない。

なお、五百木良三は『日本及日本人』を主宰するようになることから政教社の関連人物として括られることもある。しかし、政教社に関する研究は創設当初のものがほとんどであり、五百木が関与した後期の政教社に関する研究は少ない。また、三宅雪嶺が退社した後の政教社の『日本及日本人』は同名の別雑誌として見られる向きもあり、このことも五百木良三が社長となった時期の政教社に関する研究が見られない理由であろう。

⁷ 正岡子規(1913)『俳諧大要』友善堂、p175。

⁸ 河東碧梧桐(2002)『子規を語る』岩波文庫、p231。河東碧梧桐は五百木良三に関して、「(中略)その尽きない句作心から驚かされてしまった。平生見なれ聞なれていたものが、飄亭の句によって美化されて行く輝かしい世界に幻惑されてしまった。私は何よりもこの時始めて写生の意義を明かに体得したことを感謝せねばならなかった。人を見ないものを探ったり、滅多に気づかないものを見つけることが写生の真意義ではないのだ、という抽象論を具体化した詩人飄亭を心から渴仰せねばならなかった」と述べている。

⁹ 五百木良三・内田良平追悼会残務所編(1938)『五百木良三・内田良平両氏追悼会報告書』

¹⁰ 五百木良三については、関連する人物の研究書の中で説明されるにとどまっている。参考文献一覧を参照のこと。

¹¹ 「尼潜問題を通して」・「所謂大権干犯問題」・「所謂『機関説問題』は昭和維新第二期戦展開の神機」といった政治問題に関する小冊子を数点残しているに過ぎない。書籍としては、死後に政教社から刊行された『飄亭句日記』(1968年)があるが、元々の原稿が関東大震災と昭和20年の空襲で2度焼失しており完本の状態ではない。なお『飄亭句日記』には、巻末に5頁程度の「小伝」がまとめられている。この他に、雑誌『日本及日本人』第351号が五百木良三追悼号として組まれており、周辺人物の回想などが残されている。

2. 新聞人としての五百木良三

(1) 少年時代

五百木良三は1871年2月3日（明治3年12月14日）に伊予国小坂村に生まれた。松山では藩校明教館の教授であった河東坤（静溪）が設立した千舟学舎で漢籍を学んだ。ただし、寮生活となる千舟学舎への入塾は、松山県立医学校への通学の便宜が主たる目的であったという¹²。その後、18歳で大阪の町医者のもとに寄寓し、19歳のときに内務省管轄の医師開業試験に合格した。その後、五百木良三は上京して旧藩主久松家が設立した常磐会の寄宿舎に入ることとなる。五百木がすぐに開業医にならなかった理由は「当時未成年者の開業医師たることを許されざりし¹³」ためであったという。もとより医師になることは父作平の希望であり、後の回想で医者への学問が「厭であった」と述べている良三の志は、この時すでに別にあつたのではないかと考えられる。

(2) 正岡子規との出会い

1889年に東京に出てきた五百木良三は常磐会の寄宿舎で正岡子規と出会う。正岡子規は1867年の生まれで五百木より4歳年上であり、このときは東大予備門の学生であった。程なくして2人は文学上の議論などを交わす仲となる。翌1890年、五百木は徴兵に合格して看護手として近衛連隊に入営し、正岡は帝国大学哲学科に進学した。この頃に書かれた正岡子規の書簡からも五百木との文学上の親交を窺うことができる。

1892年、正岡子規は叔父である加藤恒忠の紹介で陸羯南の日本新聞社に入社し、大学を中退する。新聞『日本』は1889年2月11日に創刊され、利益を追求する新聞や政党機関紙を批判し、国民精神を回復発揚させようとした新聞である。硬派なこの新聞はたびたび発行禁止処分を受けたため、処分中の代替紙を兼ねた家庭向け新聞の発行が検討されるようになる。そうした経緯で1894年2月11日に姉妹紙『小日本』が創刊されたのであるが、この編集長に正岡子規が就くこととなった。正岡は前年の暮れに除隊となった五百木良三を記者に起用して「三面記事を担当¹⁴」させ、これが五百木にとって最初の記者生活となった。

(3) 日清戦争『従軍日記』連載

記者生活を始めた4ヵ月後、五百木良三は1894年6月15日に召集令状を受け広島に向かうこととなった。広島に滞在中の五百木に対して正岡子規は「朝鮮事件いよいよものに相成候様にていさましく候。病院付と御変り被成候由御渡韓などは思ひもよらぬ事と存候。…中略…御多忙と御不平とは思ひやられ候へども時々五頁種御製造御送付被下度候¹⁵」といった書簡を送っている。ここで正岡が記している五百木の「御不平」については、五百木自身の以下の記述から窺える。

われ初め京を發するや独り密かに渡韓の事を期す。而して今や補充隊に在り。わが希望の運命も此に於て十中八九迄はたえなん有様となりぬ。されど命令は再び返す可らず。唯不平と落胆を以て有耶無耶の裡に一月あまりの光陰早く去り、自然の運命は再びわれを驅つて、我好まざる所の職を執らしめたり¹⁶。

五百木は、召集令状を受けて渡韓を期して広島に向かったにも関わらず、補充隊に配属されたまま1ヵ月余りも動きがないことや、厭な医者としての仕事を与えられたことに対して不平を抱いていたようである。

この間に、従事していた『小日本』は廃刊となり、正岡子規は『日本』本紙に戻る事となった。『小日本』の廃刊の理由について正岡は「『小日本』は経済上の一点より本月十五日を以てあへなく最後を遂ぐる事と相成申候¹⁷」と五百木に書簡で伝えている。

日本と清国が宣戦布告を出した8月に入ると、五百木の所属する隊にも渡韓の命令が下り、8月7日に広島を出発した。五百木はこれ以後の出来事を綴って日本新聞社に送り、「従軍日記」を『日本』紙上に連載している。「従軍日記」は1894年8月29日から翌95年8月3日にかけて掲載され、その連載回数は73回に及んだ。日記中には、戦闘による傷兵の治療の他に凍傷や破傷風に苦しむ軍夫の治療やコレラ対策等の防疫に追われる記述も見られ、日清戦争の一側面を写し出している。

五百木良三は1895年7月25日に無事凱旋帰国を果たすのだが、召集される前に記者をしていた『小日本』はすでに廃刊しており、立場上は失職した状態にあった。そこで正岡子規は五百木に対して以下のような書簡を送っている。

¹² 河東藩城(1937)「五百木君と千舟学塾」『日本及日本人』第351号、p8。

¹³ 河東藩城、前掲書、p9。

¹⁴ 高浜虚子「俳句の五十年」『定本高浜虚子全集』第13巻、毎日新聞社、pp36-37。

¹⁵ 1894年7月(下旬)五百木良三宛封書。『子規全集』第19巻、講談社、pp477-479。

¹⁶ 「従軍日記」(1)『日本』1894年8月29日。

¹⁷ 1894年7月(8日)付五百木良三宛封書。『子規全集』第19巻、講談社、pp474-475。

神戸病院より軍隊宛にて大兄へ発したる愚書御披見相成候や、日本新聞へは既に帰国御通知相成候や¹⁸。まだならば至急陸宛にて一封御発可被成候。(中略)

大兄方向については今後如何なされ候や。それも何度又愚考をも申上度存候へども書面にては尽きまじく、いづれ帰郷の節、御面会の上と致すべく候。但し、御考案も有之候はゞ至急御報下され度候。事によれば、陸に依嘱する事にも相成申べく或は万一陸の方で予め一考する所ありしかも知れずと存候。併し、これは憶測故其つもりにて御含み置被下度候¹⁹。

結局、帰国した五百木良三はこの年の冬に正式に日本新聞社に入社することとなり、随筆や文学評論を書くとともに、衛生・教育・宗教などに関する記事を主に担当し、議会が始まると貴族院の傍聴録を担当するようになった²⁰。

このようにして、五百木良三は新聞『日本』の記者としておさまった。しかし、記者としての地位を得た五百木は次第に置酒豪遊をするようになり、1897年11月4日に正岡子規から手紙で忠告を受けている。その中には「新聞の文章兄のを評して冗長なりと言ふ者多し、陸氏亦之を憂ふ。兄の書ける雑報には自己を現出したるもの多し。雑報は成るべく無関係の地に立って書するを要す。自己を現すは気障なり。右二事反省を願ふ²¹」といった記者としての技術面の指摘もなされている。

(4)近衛篤磨との出会い

新聞『日本』において貴族院を担当することになった五百木良三は、次第に貴族院議長であった近衛篤磨の知遇を受けるようになる。また、この頃は近衛篤磨と日本新聞社とが政治的な活動を共にするようになる時期でもあった。

1898年、近衛篤磨は荒尾精門下の白石竜平、中西正樹、井手三郎などととも「支那問題の研究と共に支那事業の実行を担当し、各般の調査に従事²²」する同文会を組織したが、日本新聞社の五百木良三もこれに名を連ねている。同年、福本日南の渡欧送別会の席上で陸羯南、三宅雪嶺、池辺三山、志賀重昂ら政教社ないし日本新聞社のメンバーを中心に東亜会が組織され、東亜問題に関する研究が行われるようになった。これには玄洋社社員であった内田良平らも参加している。目的がほぼ一致していた同文会と東亜会は、同年11月2日に合併して東亜同文会となった。近衛篤磨が会長となり、幹事長には陸羯南が就任した。こうして東亜問題に関心を寄せる言論人や政治活動家をほとんど網羅する団体が誕生し、近衛篤磨と日本新聞社が接近するようになったのである。

(5)雑誌『東洋』創刊

1900年9月24日、義和団事件のあとロシアが満州を支配下に置いたことを受けて、国民同盟会が組織された。国民同盟会の発会は東亜同文会の幹事会において準備されたものである²³。東亜同文会はそもそも教育や文化面での交流や、経済的な交流を促進させる活動を旨とした政治色の薄い組織であった。そのため、対露問題という極めて政治色の強い課題に対処するには、新たな枠組みで団体を組織して運動を興す必要があったものと考えられる。

国民同盟会を設立した近衛篤磨は、その見解を公表する手段として雑誌『東洋』の創刊を計画する。雑誌『東洋』は国民同盟会の機関誌的な役割を果たすものであったが、とくに機関誌であることは謳わずに、その位置づけは近衛篤磨個人が発行するものとされた。1901年1月31日の近衛篤磨日記には「緑屋に赴く。田辺為三郎、大内暢三、五百木良三、柏原文太郎等と雑誌発刊の事に付協議の為なり。十時過一同徒歩帰寓²⁴」とあり、この雑誌の準備段階から五百木良三が関与していたことが窺える。ここで名前があがっている人物は、いずれも東洋倶楽部の成員である。東洋倶楽部は、近衛篤磨のもとに集まっていた青年が設立した政治グループで、1900年7月19日に発足したものであった²⁵。その後も2月16日「面会 五百木良三 発刊雑誌の事」、3月2日「面会 五百木良三 経緯社²⁶の事」といった記述があり、雑誌発刊を五百木良三が中心となって準備していったことが分かる。さらに、近衛篤磨は3月10日に陸羯南と会い、五百木良三を日本新聞社から経緯社に転じさせる相

¹⁸ これと同日に陸羯南から正岡子規宛に出された「犬骨氏広島への帰り今日書面、九月不日解隊の上予州に帰り、直様上京と申候。途次御尋ね可申上様書面出し置候」(『陸羯南全集』第10巻、みすず書房、pp85-86)との手紙があり、五百木良三はすでに陸に報告を済ませていたと思われる。

¹⁹ 1895年7月30日付五百木良三宛封書。『子規全集』第19巻、講談社、pp574-577。

²⁰ 寒川鼠骨(1937)「追憶(何こや彼や)『日本及日本人』第351号、p20。

²¹ 1897年11月4日付五百木良三宛書簡。『子規全集』第19巻、講談社、pp210-215。

²² 近衛篤磨日記刊行会(1968)『近衛篤磨日記』別巻、p401。

²³ 近衛篤磨日記刊行会、前掲書。第2巻、p47。

²⁴ 近衛篤磨日記刊行会、前掲書。第4巻、p35。

²⁵ 近衛篤磨日記刊行会、前掲書。第3巻、p126。

²⁶ 経緯社は、近衛篤磨が雑誌発刊のために経営した出版社のこと。『東洋』の奥付によれば、所在地は京橋区弥左衛門町一番地とある。

談をしている²⁷。そして日本新聞社を退社した五百木良三は経緯社に移り、雑誌『東洋』の編集を任されることとなった。雑誌『東洋』は1901年4月10日に創刊され、以後毎月10日と25日に発行された。

雑誌『東洋』は国民同盟会の意見を広める目的で作られたため、最初から売れるか否かは問題にしていなかった。2月28日付の全国同志記者倶楽部の『通報』は、この雑誌が「広く欧米諸国及び清韓の重立ちたる政治家、新聞、雑誌社等へ頒布する計画²⁸」であると伝えている。また、「本来売る為の営業雑誌でないからといふので、費用は惜まらずかけ、大部数を刷り、貴衆両院議員を始め、朝野の政治家、政治団体、各地方新聞、地方の有志等は勿論、東洋平和策の論説は英訳して之を海外の各国政治家にまで贈呈する方法を取った²⁹」という。そのため、一般販売（1部12銭）の他、広く頒布されたこの雑誌は世の耳目を集めることとなり、貴族院議長の雑誌であるということから海外のメディアからも注目を浴びたのであった³⁰。

『東洋』には論壇欄が設けられており、出資者の近衛篤磨や、戸水寛人や寺尾亨などの学者、大隈重信や青木周蔵などの政治家による論説が寄せられた。この他に「大勢」や「時論」などのページがあり、五百木良三はそれらの場所で健筆をふるったものと思われる。また、『東洋』は発刊から13冊目で巻号を「第2巻」と改めており。編集の仕様も変えて新たに社説が設けられるようになった。この当時の五百木の仕事を「毎号近衛公に代り、公の意見を筆にしていた³¹」と評するものが正しいとすれば、この社説欄が設けられて以後のことではないかと考えられる。

さて、近衛篤磨と日本新聞社が東亜同文会や国民同盟会の運動を通して接近したことは前述のとおりであるが、1901年に近衛による日本新聞社への資金援助の話が持ち上がった。陸羯南はそれまで谷干城や品川弥二郎から資金を得ていたが、品川は1900年に他界し、谷とは北清事変などについて意見が異なり疎遠になっていたのである。

1902年1月7日、近衛篤磨が日本新聞社に出資する約束が交わされた³²。このときに近衛が出資の条件に出した内容の1つが、雑誌『東洋』と五百木良三ら経緯社社員を日本新聞社が引き受け、『日本週報』の題号を『東洋』と改題することであった。結局、『日本週報』の題号はそのままで、「東洋」と題した論説欄を設けるなど紙面の改編を行うことで話がまとまり、五百木良三は1年ぶりに古巣に戻り編集長の職に就いたのであった³³。

3. 『東洋』合併以後の『日本週報』と五百木良三

新聞『日本』の附録として誕生した『日本週報』は、そもそも、本紙だけでは不足していた記事の多様性をもたせるために1895年6月に発刊されたものである。その内容は、1週間の出来事の要約、文学関係記事、投書などを掲載したものであった。しかし、この文学記事中心の紙面は雑誌『東洋』との合併によって一新され、1902年1月13日付紙面に掲載された近衛篤磨の「帝国今後の急務」を嚆矢として、以後は政論を中心とした紙面構成となった。合併前は1面に配置されていた1週間の出来事をまとめた「日抄」欄も、合併後には8面にまで後退している。論説記事の内容は、雑誌『東洋』時代の傾向を引き継ぎ、東アジアをめぐる問題を取り上げるものがほとんどであった。

『日本週報』に合流した『東洋』は、そもそも国民同盟会の意見を広めるために発行されたものであったことは先述のとおりであるが、1902年の4月になると、国民同盟会は露清間の満州還付条約の締結と日英同盟の成立をみて、「国民同盟会の主義遂に容れられ、主張行はれたるなり³⁴」として解散をすることになった。1902年4月28日付の『日本週報』は、国民同盟会の解散を伝えるとともに、近衛篤磨による「国民同盟会解散に就て」と題された漢文と国民同盟会宣言書を掲載している。その後、国民同盟会の解散によって『日本週報』は「東洋」欄の存在を持て余したのか、翌週5月5日には論説を掲載せず、諸外国の情勢を記した「大勢」欄を1面に繰り上げて紙幅を埋めている。

ところが、周知のようにロシアが満州撤兵の約束を有名無実にしたことで、日本国内における対露強硬論が再燃することになる。満州撤兵の第2期の期限が近づくと、『日本週報』は伊藤博文などが主唱していた満韓交換論を否定し、「勇往敢進満

²⁷ 近衛篤磨日記刊行会、前掲書。第4巻、p90。

²⁸ 近衛篤磨日記刊行会、前掲書。第4巻、p69。

²⁹ 寒川前掲書、p21。

³⁰ 『東洋』第9号の「雑纂」の中に、同志に対する露国新聞の反応が掲載されている。

³¹ 寒川前掲書、p21。

³² 近衛篤磨日記刊行会、前掲書。第5巻、p8。

³³ この件に関して松田宏一郎氏は、「経営の建て直しにからんで、(自らに近い)五百木を日本新聞社の中心に据えようという考えが近衛にあったのではないか」という見解をもたらしている(松田宏一郎(2008)『陸羯南』ミネルヴァ書房、p273)。丸括弧内は引用者による。

³⁴ 「国民同盟会の解散」『日本週報』1902年4月28日。

州を露国の鉄握より救済せざる可からざる」と主張し³⁵、さらには「只断乎として当初の志を遂行するに勇往放進し、干戈尚ほ辞せざる可きなり」と強硬な意見を展開したのである。『日本週報』のロシアに対する強硬な立場は一貫しており、クロパトキン陸相が来日した6月においても「今や只断あるのみ、断々乎として吾国千歳の禍根を芟除するに努めんのみ」と主張し、8月になると「何故に開戦を躊躇する歟³⁶」と他紙に先駆けて開戦を唱えた。

ところで、経緯社から日本新聞社に移籍して編集長に就いた五百木良三は、新聞『日本』に従事しながらも近衛篤磨の翼下で行動し続け、1903年には近衛篤磨を擁した政治組織「桜田倶楽部」の設立にも関与している。そもそも、小川平吉が近衛篤磨を頂いた政党を準備する目的で動いたものであり、1903年6月頃に五百木良三は数回にわたって小川平吉等とともに倶楽部の設立について話し合っている³⁷。その後、桜田倶楽部は1903年の秋に設立され、五百木良三は小川平吉や大内暢三らとともに幹事の役職に就いた。五百木良三は日本新聞社を辞した後は、「桜田倶楽部に拠って天下の浪人となった³⁸」とされるが、退社の経緯と時期は明らかになっていない³⁹。

なお、五百木良三は編集長の職にあったものの、陸羯南の洋行中は古島一雄が『日本』本紙の編集を行っていたようである⁴⁰。そのため、『日本』本紙と附録である『日本週報』の論調が分かれる結果をもたらしたと考えられる。『日本週報』の東洋欄に掲載された論説は基本的に無署名であり、具体的にどの記事が五百木の執筆によるかは判じがたい。しかし、編集長の立場にあった五百木が『日本週報』の紙面に責任を負っていたことは間違いないであろう。時折、「鬼山」と署名された論説記事がみられるが、これは五百木とともに経緯社から転じた神谷卓男によるものである。

4. 結語

以上のように、本研究では五百木良三に関して、新聞『小日本』・新聞『日本』・雑誌『東洋』・『日本週報』に関与した時期に焦点をあてて、その活動の内容を明らかにしてきた。ここで得られた成果は以下のとおりである。第1に、これまで断片的にしか綴られてこなかった五百木良三の初期の活動について、史料をもとにして、その経緯を明らかにしたことである。五百木良三に重要な影響を与えた人物が正岡子規と近衛篤磨であることは論を俟たない。正岡子規と近衛篤磨はそれぞれ、五百木良三の生涯を俳人や政治活動家として方向づけた一方で、新聞人として活躍する場をもたらしていた。正岡子規の『小日本』で記者となった五百木良三は、日清戦争の「従軍日記」を『日本』に連載して名を馳せ、本格的な記者生活を体験する。この記者生活の中で築いた交友関係は、後の政治活動の基礎となるものであった。第2に、日露開戦過程における新聞『日本』本紙と『日本週報』の論調の違いに関して、その背景を明らかにした。出資者の近衛篤磨の影響を色濃く反映した『日本週報』に対し、『日本』本紙では旧来の編集方針を堅持しており、単純に対露強硬派を支持したわけではなかったのである。そのような日本新聞社内であって、五百木良三は近衛篤磨の翼下のもと編集長として『日本週報』に対露強硬論を掲載していたのであった。

主要参考文献 ※脚注で紹介したものを除く。

- 1) 有山輝雄 (2007) 『陸羯南』吉川弘文館。
- 2) 加藤祐三 (2010) 「解説『東亜時論』」、『東亜時論』第3巻、ゆまに書房、pp487-543。
- 3) 酒田正敏 (1978) 『近代日本における対外硬運動の研究』東京大学出版会。
- 4) 佐藤能丸 (1998) 『明治ナショナリズムの研究』芙蓉書房。
- 5) 翟新 (2001) 『東亜同文会と中国』慶應義塾大学出版会。
- 6) 山本茂樹 (2001) 『近衛篤磨』ミネルヴァ書房。

³⁵ 「滿韓交換論は邪説なり」『日本週報』1903年3月30日。

³⁶ 「何故に開戦を躊躇する歟」『日本週報』1903年8月3日。

³⁷ 近衛篤磨日記刊行会、前掲書。別巻、pp505-509。近衛篤磨宛、五百木良三書簡。

³⁸ 阿部里雪 (2004) 『新編 子規門下の人々』愛媛新聞社、p136。

³⁹ 政教社から刊行された『飄亭句日記』に付された「小伝」には、「37年1月近衛公薨じ、多年の盟主を失ふ。先生乃ち城南荘に立籠り、故公の遺旨を奉じて東亜問題解決の為に尽瘁すること、十年一日の如し」とある。また、山上次郎氏は「飄亭や義郎が『日本』新聞を去るのが、明治39年である」（『歌人森田義郎と子規・飄亭』p209）としており、五百木の退社について、伊藤欽亮の経営に反発した三宅雪嶺らが一斉退社した件に含める見解を示している。ただし、三宅雪嶺が起草した「退社趣意書」に名を連ねた22名の記者の中に五百木良三の名前は確認できない。

⁴⁰ 近衛篤磨日記刊行会、前掲書。別巻、p534。